長崎土産

洋学文庫
文庫8
B 86

長崎土產序圖繪

有京畿名勝而諸侯邦相踵襲文之

佐幽篤文叁主人叢丹而

青陽紅山毛水胡止人

於崎頃

觀之

奇

39 7934

吳越西檝等父數條
名曰長崎土產欵使
人人不父親入英境
而聖知其勝狀壯觀
請說於余余官講經
不暇固辭强之曰錄

其大指弘贈王父云
弘化丁未春二月
肯綮集義惰農饒田
錢少帝書唐公吳戚王孫

むかし毛国くの名と語蒔舎とふ
史ありきとてもあるようなりてこそも
磯野文雄わらはに長崎の名をとる所
とこそ乃おもうけたるものあるをうけたるものとこそ紀をくとへ長崎のお産と記と
いとふ都を書乃遠き国人をあはれとに

そのむかしの紙高くしてあるものこそ
海とる文雄のいとふしたしきの
地よりのぞんをもものおもかるひとに一老
を家つとも学くとと思へまに筆
とつくいもうさ決をえ四のとこ面とし
けめ乃いとのよ明年

かしひ宮のいりつ海をよめる長歌　　饒田喩義

いはまくもあやにかしこしかけまくもあやにかしこし神代のはしめより
人神のかしこきのいそのみのるたふとさひのかしこき神のいきほひ
の宮のつき御代らつのきみ天さかる向津媛のかしこきや松浦の
おほみことかしこみつくしの国のちはやふる香椎の宮の一の宮の
庭のおもにまします姫神のみことにのりて海へはゆくそ
おほきさきみの海のいほつなちはやふる神の御をしへをあめのまゆ
ひさかたの天の乃天津乃新羅のおしかせて雲をかきわけむかつ国
韓國の島ま國のやくにのまつろはぬ国のくにをいそしきいそ
いやちはやふる國にわたりそのことのもとの神なからまつろへ海
ひたたせるわたの日のかみのさきしきは瑞穂の國に玉藻なるうくさ
うらして船の艫の梶のかはいやそつききゆることなくそのはなもと

瓊廼浦人しるし

のりし海ひし神よのそのかみゆといはまもかもうきのけるとふなき海の
玉の浦廻にあとたつくの唐人も赤毛のおらんだやつらもをちこちの舟よせ
西よりの商らくる八十の島曲の人までも志帳このほ玉これの小船
大船ゐつまとさしもつかとさしてわさの京にまゐの志しかこかうわたて
わらひまつらむ事をつとひきのしにくへの穂のくへある物もいやあくにち
あやなるとおもふことくなる四澤のいやさはに来しひの家所國のこと
かちきつめれそらつそこの人もあさはひ月に日にくまもさのえぬまちはふ
神の御世よりのうしもよ志らしめすむ神よ八ちそしきものゝ神わさ
書に於しきそのらうへあるゐなそのいましへに日の本のこれのやまとは
壹目れしくやそ國くはしわこ千足の國とはつりのこくのあや
國中つ米國の志あ良とかりつき為へし国をこれの山常は

観清人戯場作歌

中島田翁

うつゆふのこもりまつろふちはや乃長崎の津に来る
唐土もろこし人は禰宜たまひめぐとゝのへまをす
うみのとほ小しまの山乃山もとに庭にはなまつれ
ありそれ家清く御垣して高くしたへさとにあらひ舞ひ遊ひし歌
御代のよひあそふするうはよろこひ舞ひ祝ひ奏ひ
大清代をたうひまつるとあつる國の土まにまにとふから
の神よ神へるむろ代座中にきよ紀ゆひあけ歌舞て

石竹の花さかりをはとうるの事なれば乃
崎さき花の月こうばたてむさてたる百とをえひ
こ竹ものをはることを毎年あつ紀屋に花竹石を
たくさんのをものをもめへ竹のはをそ人をあひ
ものへあるこすをなへ毎年やめをまゝまちひ酒
をこ竹いとをまゝ屋井にへおろしをきをあや
しくもめつらし紀のもはをこの三つあつれみられ
世のを国ふかとまつふをたにまひおをとるおをを

さをのまたるおめすかひたあをせて左を和よわ
生こるへををのこまあををこをあるよ世を
いうらまふををこるへ人をうほをりてふ和あく
らあををふをきこをあひてのくらふをて
をこうあををあこをあををあさひてみきあやの
袖をふあひをもめいうをかこを和よをあひをあを
みをこひをはへつこをあをこをねををあやく
をををこるはををやををくこをををはをやをを人

この度人まち所うあらたぬ　まさ子
さらし　　まろこの人まちひあそる
もうらやはなもあるめるや　みとの五郎
ほうこの人のふうせはなをしらえもら
つまうら

磯野信玉書

日本列化二年乙巳中秋後十日偏
宮崎館保書

山園都邑在西邊百里遠
絲是洞天岑列層堦矣
兩成港迴一水引羣川孔毛
絲眼法麝要明珠於
越船

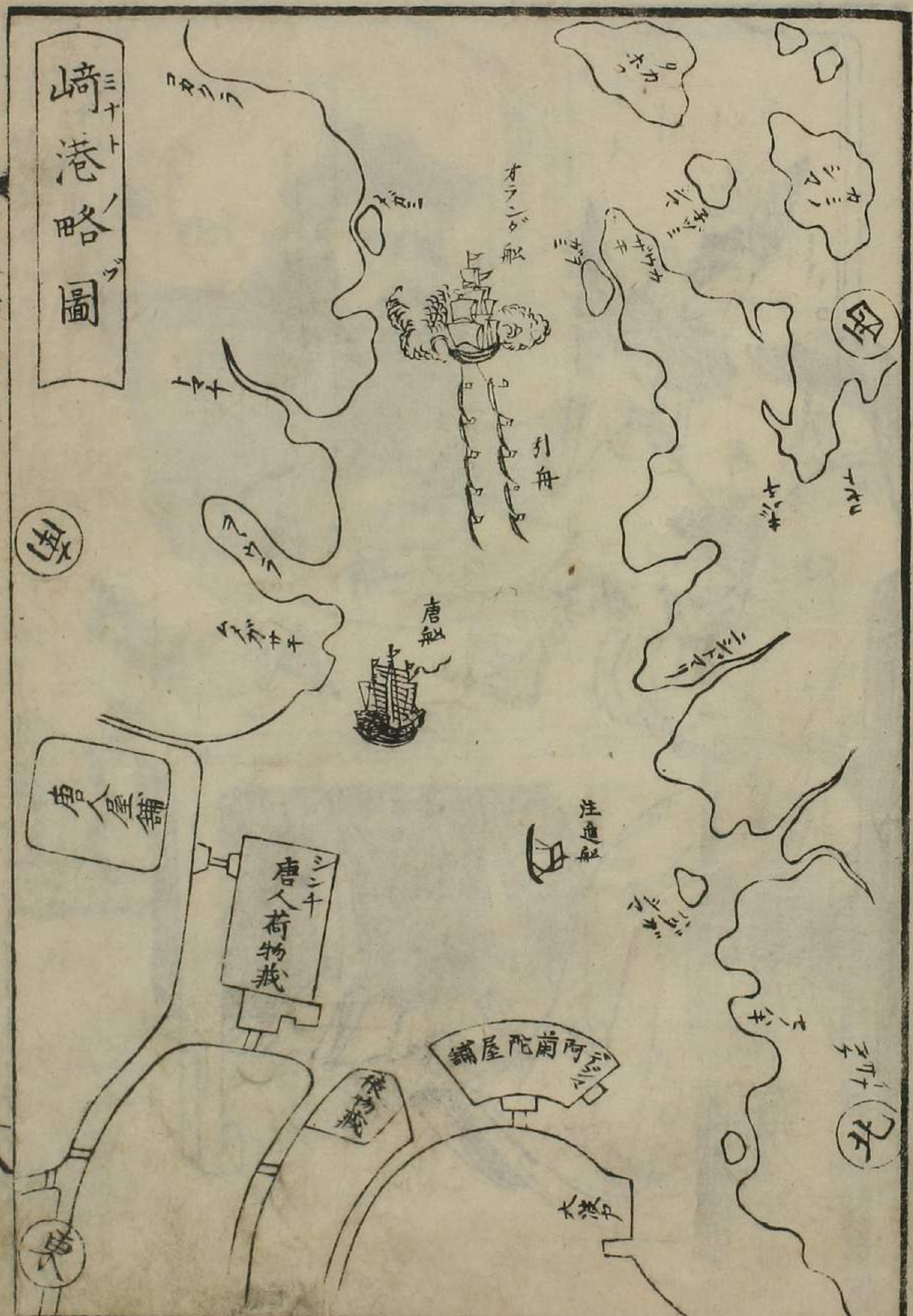
歪代乃ち柔遠化殊方重譯尚津
年

勾吳沈萍点

日野前大納言資枝卿御歌

唐人通美以そ萬奈
布留船安波多味
耶越孫とう耳か
須毛阿さ耶岐

萍叟



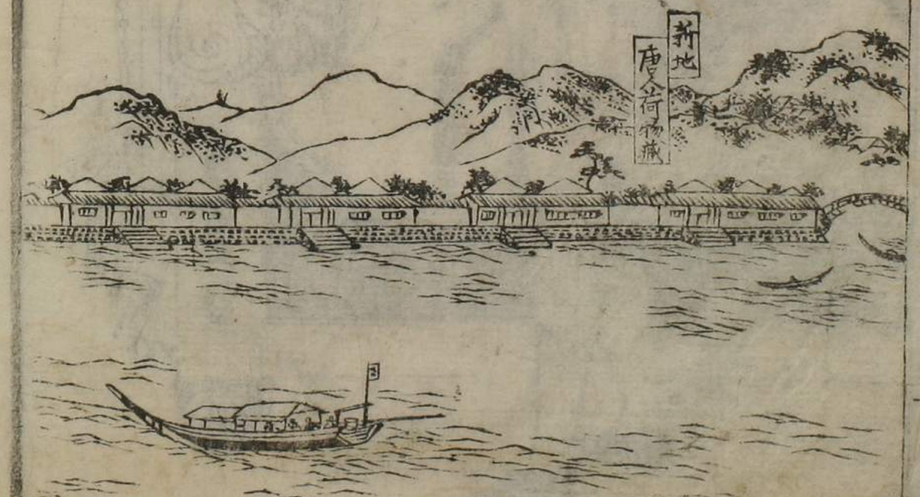
清朝人
クウジン
春去春來忽一年客逢元旦似前緣屠蘇淺飲三杯醉桃符高懸萬戸連花媚鳥鳴增筆力風清日麗滿山川歸家問我崎陽事細説雍穆堯舜天
朱子章
陳記

HOLLAND
SCHE
uurmerk.
人モンダ紅オラ
クロボウ

◎唐船（タウセン）

孫靜濤

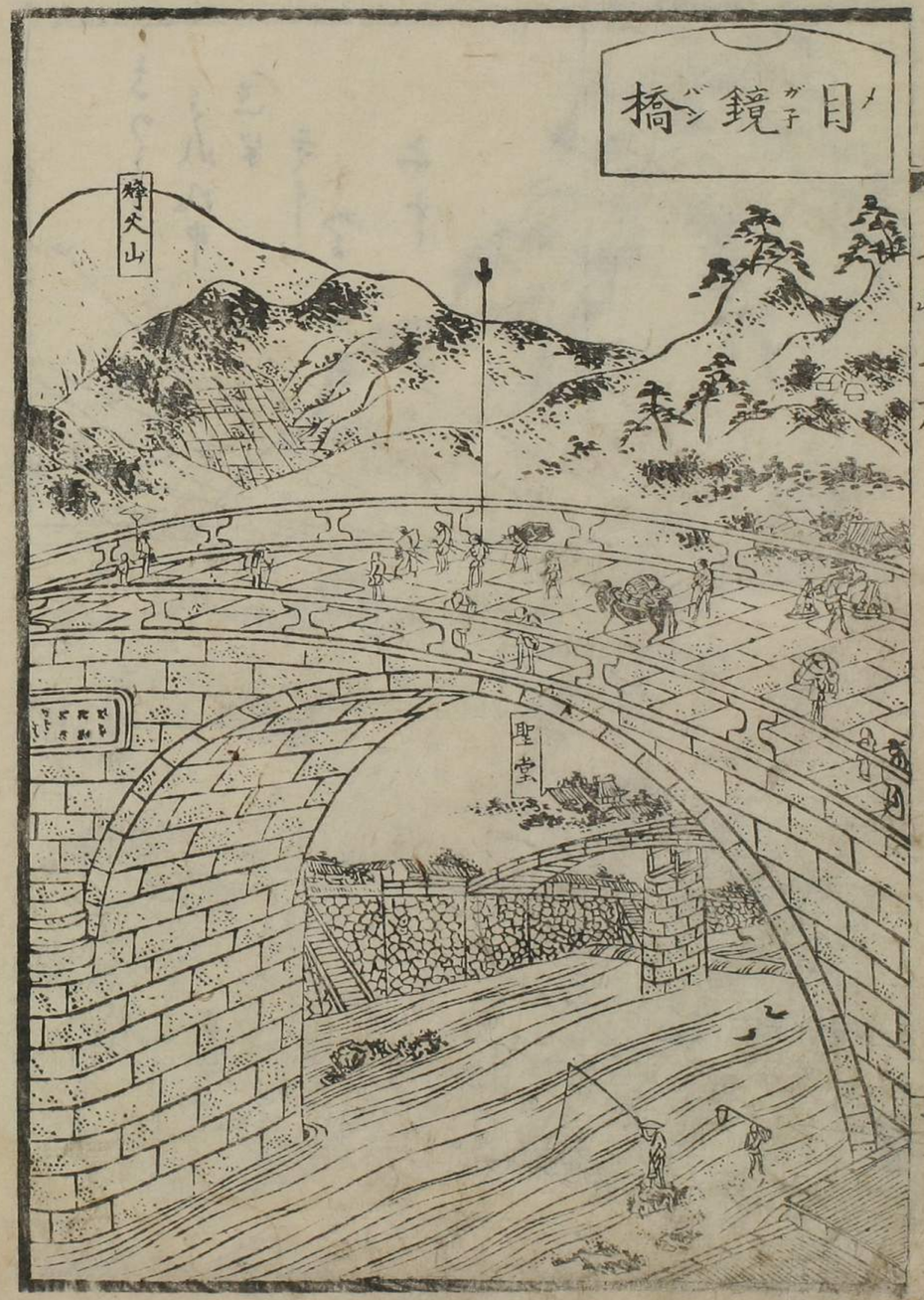
青雀飛來泊海邊信通吳
越意無猜年年中土人留
此應道崎陽別有天



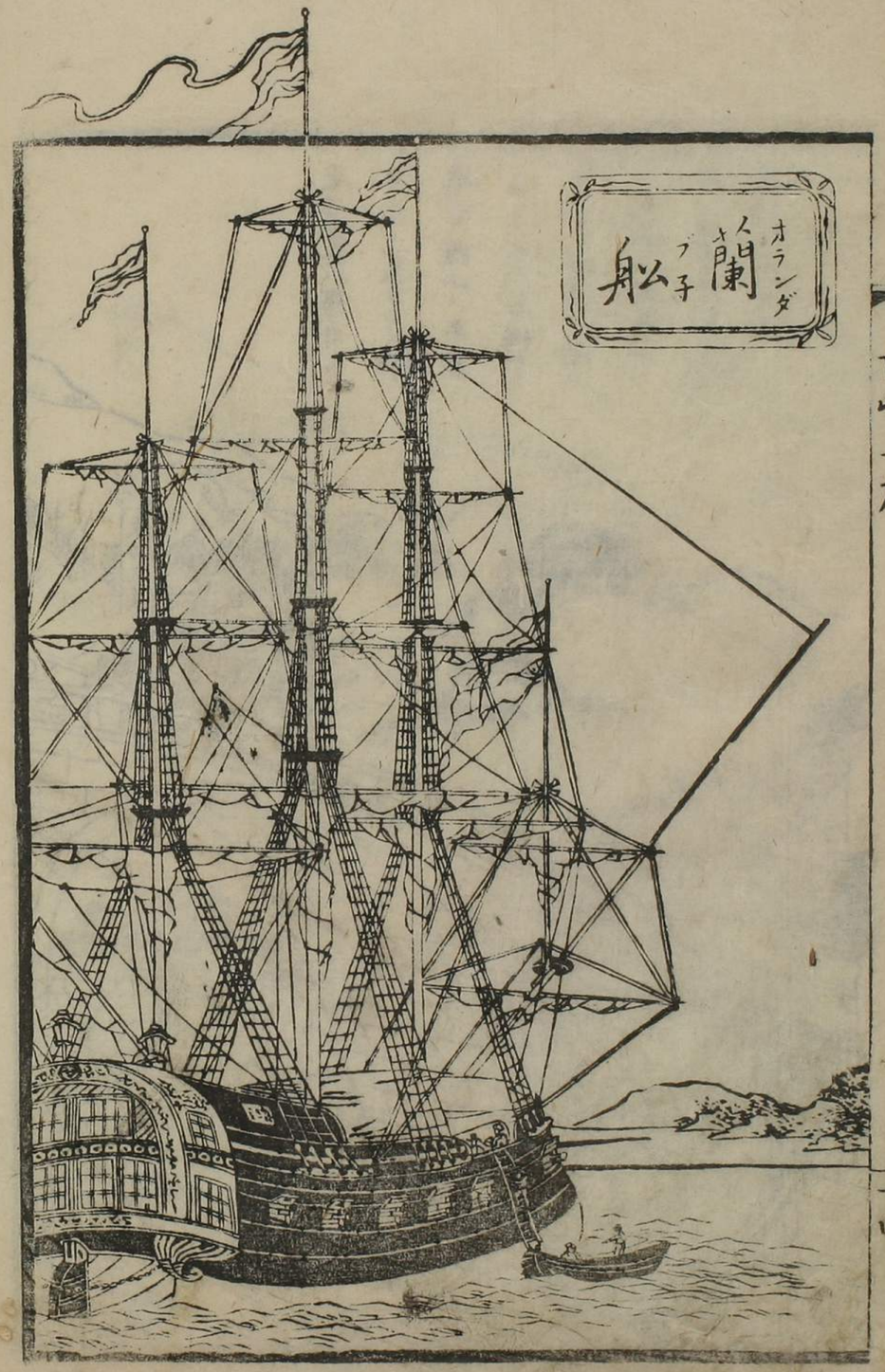
唐館
タウジン
ヤンキ

唢笛何人慰靜閑
風前豈聽弄場關
清宸声散泛樓夕
夢落匂呉於越間

金比羅山



東海墓ハ澤司東
海氏ノ墓ナリ春
徳寺後山ノ半腹
ニアリ石門石欄干
ヲ設ケ墻壁ヲ圓ニ
シ花卉ノ雕飾アリ
或ハ文字ヲ刻スル
其巧ヲ尽セリ



紅毛萬里が艦艦
通貢来港口山將裂
巨炮聲 李雷

長逝齋

蘭館
オランダ
ヤシキ
丸山遊女

扇嶼夕照
高嶋
音全

Holland ironist

文政己丑七月蘭舶載一婦人来即坪
井利奴之妻名補し年十九隆鼻深目肌
膚透室景巧文技旁吾書画聞嫁後二
閑月夫祇役于日本繾〻之情不忍都
居故来云

OLIEANT

文化十癸酉紅毛舩持渡
象牝 出所セイロン
歳三才

高六尺五寸
頭ヨリ尾キハ迫七尺
前足三尺
後足二尺五寸
足巡リ二尺五寸
鼻長三尺五寸
尾長四尺五寸

大波戸
オハト
イナサダケ
鉄炮玉

モヒス社
一天四海皆帰命
南無妙法蓮華経
妙寿丸
順風相送
先祖代々
一切精霊
西方丸

諏方社

清きく吹きまさる峰のめぐしく長くて諏方のみやしろ
山のそこ打ちさくもたゆたなびきやまもの社おろそかゆゆしくて

冷泉前大納言 為村卿

阿蘇の宮の
えらばれ
第代と
言葉
いにしへ
諏訪の
神

前大宮司
青木丹波守永春

其二
神事
オトリ
踊子

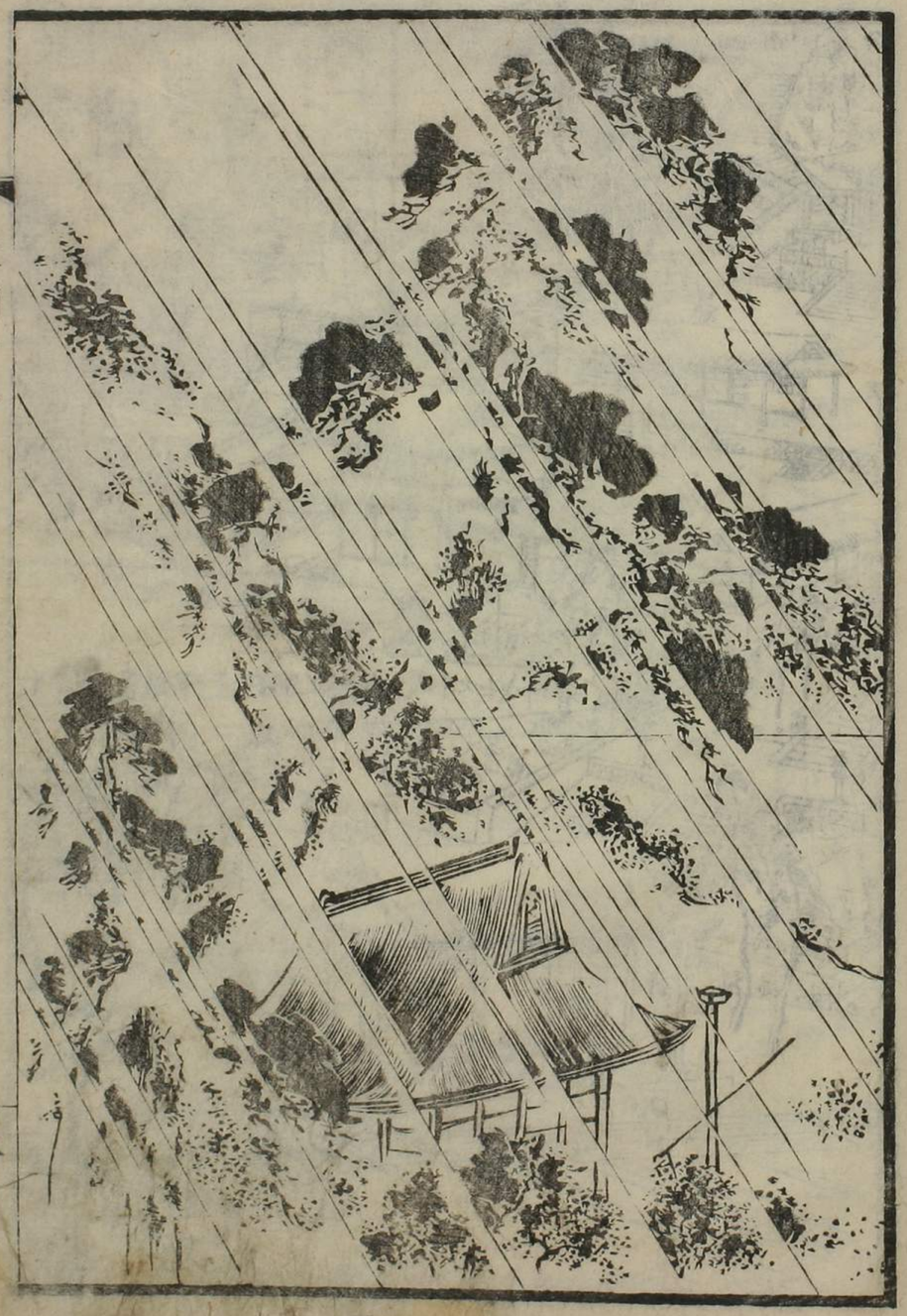
九月神輿出向
宮巡り西戯市
西東練裏雑佩
某美女彩服言
裁總角童童尾
肴栩詠曲巷鑿
絃急管列弦工
若狂終日人皆
醉庶与周吋
八埼同

右四南敲

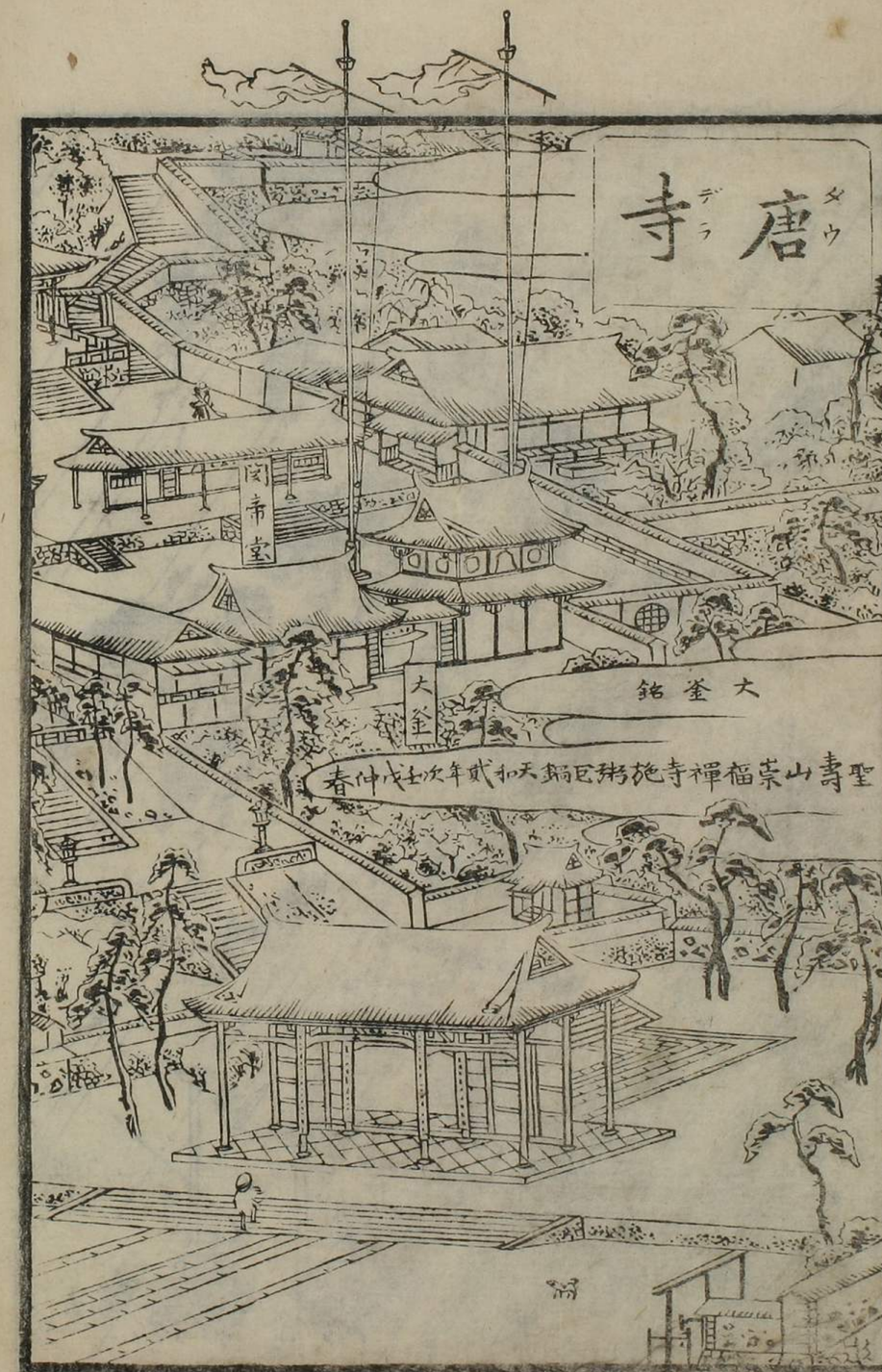
御崎（ミサキ）

イハウジマ

慈像千年八尺高通身手臂不知勞
氣衝妖孽空羣滅影射魔軍拂地
塵一鎮御崎多衆利七分名利放圓
竟行基到處便生事　眉目依然
高玄岱



唐人墓
全レン
天皇海内奉雙地
帛伏龍伸不二門
第一峰
中門ガ


唐寺
関帝堂
大釜
大釜銘
聖壽山崇福禪寺施粥巨鍋天和貳年次壬戌仲春

百尺松杉作翰屏重、樓閣迥
蒼其象王隔水天然白獅子臨
春分外青十里煙花歸指顧
千家燈火照禪扃雲堂梵静聞
箫鼓中國帆檣泊晩汀

唐山道本

長崎土産

○唐館

唐館造立の事ハ元禄元年戊辰九月廿五日経営始りて翌年の四月十五日小功成就せとぞ

唐船の入津せる事ハ夏船冬船とて年小両度なり已に港に来り碇泊して後ハ唐人悉く館内に移りもき載来る所の貨物皆新地乃庫に入きたらる貨物運送の時ハ諸吏員監一九荷役精荷役等の名目ありて船中人衆乃名称ハ正船主大船頭副船主脇船頭財副筆者助役総管一船ノ諸用ヲ弁ル客長船中ハ客ノ扱主船持主

艪長（按針役也船中水手ヲ艪討ト云按針役ハ針ヲ考ヘ方角ヲ教ヘ水手ヲ下知シテ船ヲ乗リ取ル役也故ニ水手ノ長ト云意ヲ以テ艪長ト称ス）

舵工（揖取役也）　頭按（按役）　香工（船魂神ニ香花ヲ供フ）　押工頭（揮梁大工）　押工（平大工）　直庫（太鼓役）

大綜（帆綱役）　一仟（大帆ノ役）　二仟（第二帆役）　三仟（第三帆役）　亜板（帆柱ニ上ル役）　總哺（飯賄役）　老大（水手頭）　工社（水手ナリ長崎ノ俗コノシヤト称スルハ小厮小者ナリ等ナリ誤ナリ泉州ノ言葉ニテコンシヤトス）

新貨庫　唐舘は西の海中ふ有り元禄十五年建唐船乃貨物を入置ける處なり

唐人踊ハ春二月の初ふ礼行ふ土神祠の祭禮あり二月二日を祭日として前後三日乃間此事ハ土神祠の前ふ高大なる舞局の臺ふ設ケ拵へ色々ふ粧ひなし在舘ハ唐人其事ふ巧なるもの種々の衣冠裝束ふ着け綾羅錦繡を裝ひ臺上ふ出て歌舞ふ技をせり其事体ハ水滸傳三國志或ハ稗官小説の内ふ用ひたるなり楽器ハ鈴鑼拍板囉叭噴吶鈸鑼笛大鼓（片張ヲ提琴ト用ヒ胴及ハ柄ともふ竹ふて礼作ふ蛇皮を張り二脇の糸をかけ尾ふ通ふて礼を以て指りなり）三絃（木ふて作り蛇皮ふ張り糸ハ三筋ふて掻ハ鼈甲を以て造る）ふて拍子ふなる是他邦ふ比類なき美観なり

○金毘羅山紙鳶會

金毘羅山ハ崎中の北ふあり一名魚凡山又瓊杵山と云麓ふ曠野ふ三月十日金毘羅大権現の祭日ふして其日ハ大人小児各く行

厨に携へ酒樽を推して曠野にいたり紙鳶に硝子を仮に付て共に勝負を決せられ候はゞ玉菌人に持渡る硝子器の割るに至極細末にして糊に和し是を掌に塗ぬれば日に乾し束ね置名ばかりて硝子と云紙鳶の糸に時に紙鳶に放つ人とも仮に倚て是に五十間百間二百間紙鳶の大小ありて着け手許に皆平生乃掌に仮用ひられを呼て根と云五に小此法を以て紙鳶に放つ野を隔て谷に越て空中に呼相争ふ彼と此と交て風に乗て摺合遂に切きてゆく負と定む且風の強弱に寄り勝負乃遅速に寄り能揚て

切る時は雲に入り霞に消て境に越てわろ素くて業乃巧拙其人の手の裏に有るに紙鳶の製一なるべきに此時や専らにぐに用ひ是則初昆崙奴の製作にして風に放ちて左右に仮に便利にて凡ばかりに至りて小兒輩の楽わるに非ず亦春時の奇観なり

目鏡橋

酒屋街にあり寛永十一年 興福寺住持唐僧如定築是長崎石橋の始めなり慶安元年平戸氏好夢と云る人重修せて其形象の似に依て目鏡橋乃名に得たり

○紅毛船

紅毛船の来津せしハ季冬なれ共初秋小至るまで滞候ゆえ其始め寛永十八辛巳の年より今小至まで年おとにしるさおとなし渡来の紅毛人乃名称ハ ヨツブルホーフトかいゝ人

ハックホイスメーストル 屋とかゝ デイスベンシール 厨所諸雑費支配役 ニゴーレ

シイブックホードル 高賣勘定役 シキリイバア 筆者頭 アレステント 筆者

ヨツフルメーストル 上外科 ヨンドルメーストル 下外科 ホフメーストル 厨処役

スチイエル 師 縫物 テイームルマン 大工 カビタイン 船頭以下船役 カピタインロイ

トナント 上按針役 ロイトナント 平按針役 シユウロイトナント 又ハクツテツトと 按針役見習 テルテ

メーストル 列料手傳 ボーツマン 惣水手頭 帆綱支配人 ボーツマンスマアト 同手傳 レキイマン

荷物入所并表柱より やり出し迄の支配人 レキイマンスマアト 同手傳 コンスターブル 石火矢役并洋中ハて砲綱支配人

コンスターブルスマアト 同手傳 ボトリイス 厨所湯并食用之品支配人 ホトリイルスマ

アト 同手傳 コツク 料理人 コツクスマアト 同手傳 レケーブステインムハマン

船大工 セイルマーカル 帆縫 スミツツ 鍛冶 コイフル 捕細工人 クワルテイール

メーストル 端船支配并水手夫くの場処江遣す支配人 トロンベットル 喇叭 等なり

○紅毛館

紅毛館ハ海中ふあを門前ハ即ち江戸街通り北ち扇面ゑ似るりまして扇嶋と称し俗小出島と云館中ハおゐて年

定まる祝日ハ阿蘭陀正月（冬至の後十二日目）戦勝日（彼國の六月十八日より始まる為）（去て日本に於て八芒種の後十二日目ハ）ジヤカタラ赤業喇児の誕生日おどり此日ハ紅白青の旗を建て盛饌を設けをして鉢中大小賑ゑ

せりこに食冊を挙く

○阿蘭陀正月献立

大蓋物（味噌汁）　雑煮（ごまこ椎茸）　大鉢（潮煮）　鯛魚（鰈魚）　鉢（牛肉油揚）　鉢（牛肉油揚）

鉢（豚油揚）　鉢（焼豕）　鉢（野猪肉油揚）　蓋物（味噌汁）　蓋物（味噌汁）　鉢（野鴨全焼）　鉢（牛豕研合せ肉帯腸小詰納）　鉢（豕の肝を研りて）　鉢（豕を研り麦の粉小て包み焼）　鉢（ボートル煮）　鉢（ボートル煮）　鉢（ボートル煮）　鉢（ボートル煮）　鉢（豕の脳干）

鉢（鮭腸干）　酒（ローイウエイン　アフキ酒）　菓子（紙焼カステーラ　タルタ　スープ　カチールクウク　焼カステーラ）

凡阿蘭陀の食事ハ多ハ銀匙用ひをして三又鑽快刀子銀七の三品を以てをホコを三股ふをて尖りかを象牙柄

を着くれを以て器中の肉を刺し住めハアカを操て截割

れを匙ふをくれ取て喫ふるわ（匙ハ銀を以て造り其多ハ銀を以て造り）預め右ハ

三器を白金中を以中四ふ盛をてタアフル（彰子）の上主客乃前ふ

各一枚を具をを白金中を以膝の上ふ敬ひ置て一菓を食し

了をハ則三器及び金中を易置をり紅毛人の常食ハパン

をりパンとハ小麦を以粉ふして固わ牛の乳汁を以取を濃く前ふ煎ふ焼ふしをるものをり　を以て　ボートル　清

食小和し用ひ又コーヒー日本の大豆小豆木の実あり是れ磨し碎き湯水
小〻を煎じ白糖を加へ〻常に服せ我國の茶に用ひがゝし

○大波戸鉄丸

大波戸ハ波戸場なり西衙の下にあり廣さ東西九七間南
北九五間北の方竪十四間横五間半の入海なり是風波烈
しき時役船に挽入き風を凌ぎ波ふ便りて置くこゝ也
側ふ鉄丸あり周囲五尺八寸重さ唐目一千餘斤とい
ひ石火矢の玉なり

○聖霊祭

聖霊祭ハ例年七月十四日十五日なり同十三日の昼後より家〻別
ふ壇を設け其上ふ菰の編〻ものを敷き名づけて聖霊菰と云ふ仏間の位牌を
移して立并べ是れを聖霊棚と称す代〻の諸聖霊此夜の丑乃刻を
待て我家〻ふ入り来ると称して婦人女子圓團盛饌の設け有し
門ふハ家紋をつけ大なる燈籠を挑ぐこれを門燈籠といふ
古風を守る家ハ深更ふ至りて戸を鎖ぢて之を禁夜
愚老姫の輩ハ実ふ七者の十万億里乃浄土なを銀雑辛苦
して求ると思へり又棚経と云事ハ僧諸宗共比丘
尼等数内を巡りて家〻ふ実入して霊前ふ向ひて誦経

を名ぢけて掛経といふ是許多の布施物を利するふあるの
同十四日種々の佳饌を設け朝夕霊前ふ供ふ尤料理ハ皆人先
祖よりの仕来り有て老婆などゆの家ハ堅くこれを守て
古式を変ずる事なし扨此間中の中刻比ゟ男女各行
厨を携へて墓所ふ至り酉の刻ごろを待て燈籠を塔前ふ
挑ぐ一所の燈燈或ハ三十或ハ四十新死の家ハ百餘燈ふ
及ぶ親族知音の贈る処ゟ墳墓ふハ預じめ燈籠掛を
ゟいてこれを掲ぐ諸吏ハ多く上下を着し高家ハ平服ふて
参詣を小家下賤の輩ハ塔前ふ莚を展べ毛氈を鋪て酒

宴を催し相共ふ拳を打て興を尤て長崎の地ハ山々相
環て其ゟ八皆梵刹相連る処々へ数多の墳墓ふ萬燈
を点し大ふ勇ふ他邦ふ比類なく因て羈旅の僧俗一ぢ
れを択て八各奇観と称せざるなし物茂の中刻ごろふ
至て山々数万の燈燈漸く消滅し人皆山を下りて家ゟ
帰ゟ因て墳墓燈の間ハ老漢阿婆ハ家を守ゟ又
諸國遍歴の僧侶西國六部乃徒家々の門ふ立ち鉦を叩き
木魚を打て西向し念仏の聲ゟあげて
附 法見鉢といふ事あり家々聖霊の壇脇ふ無縁の霊魂を

祭を済し供饌の餘り残供ふ朝夕取おろすに悩んで奴婢もうれ残食する事を忌む故小非人乞食の輩等此を乞ふ田子まち籠残提げうれを乞ふて町々残廻る名づけて法界飯とい

同十五日寛奈を并墓所参詣十四日の式如し此夜丑の刻過

盂蘭盆聖霊流しあり預め竹残撓めて舩の形残造り麦藁残以てこれをつみ潮水の防とし帆柱残立て白紙を張り

て帆とす帆に極楽九西方九弘誓九浄土九或ハ六字其名号七字の題目各宗旨に隨ふ処残もつて大書し又ハ観

音地蔵の像残画き四更の鐘を聞て皆茶残煮て霊寛に供ふ俗通

起残三番茶と云また流し送むと暫く有て供物の湯圓菓実の類

もろ〳〵家〳〵にもてなす煮て供ふ

悉く壇上より おろして藁舩に積み舳艫に数十の竹乃竹

残設きて線香残ろ種々の燈籠を小さく縄の上に挑く吏

人巨高の家ハ奴僕うれ残肩に貧賤のものハ父子兄弟

残舁て海濱に送るもく素より船具残設けず風に任せて

飄蕩し水面に飆を出恰も舩乃順風相送り洋中に漂ふ如

通俗うれ残聖霊流しと云町々小家下賤の輩ハ家々に

舟残造りて近隣町内ともに巨舩一艘残製作して

相共ニ供物幾種か穿くまを燈籠を持出て舳艫帆柱等
ニ幣帛幾枝か挑げ外ニ造り物幾か〻〻船の先ニ立て
町〻〻〻途中雙盤を叩き鉦鼓鳴し同音ニ念仏幾
唱へて送る其聲喧〻〻として乳児も為ニ睡り幾
覺まさにする通衢観る者堵の如し流し場ハ多く大波戸
あり見物の男女児輩肩幾を群集をなす新死の
家ハ若聖霊と称し挙家名残幾惜みて五更ニ至る前
後の眠り曉天ニ至りて止む

諏方社

諏方の社ハ長崎鎮守の神社ニして祭ル所の神三柱あり中諏
方大明神左森崎大権現右住吉大明神なり往古ハ三社各別
所ニ坐ス鎮座の始め幾詳ならざれとも奉祀ハ已
ニ久し爰ニ肥前佐賀の住青木賢清（金重陀と号ス）其先ハ大職冠鎌
足公の孫太宰少貳藤原廣継廿六代の後胤青木中務大輔藤
原鎮永の三男にして頗ル勇剛且武術幾善を故あ
りて山伏となる役の小角ハ道幾学ぶ元和中始めて長崎ニ
来ル然るに元亀天正乃頃ハ蛮賊来りて脅かし把せ
り鎮内の神社一時ニ没倒していまハ微なり賢清こ

慷慨し前の宮司の孫公文九郎左衛門小渕し三社に併せて
同殿小祭り長崎鎮守再興の事に謀る九郎左衛門大に
歓び一封の濃り状に賢清小典ふ是よ於て書に改して
京所吉田兼英卿小達ま法乃処即ち雑掌鈴鹿采女正小
命し答書して許容ある実小元和九年春二月多り翌寛永
元年宮小申し社地に彩び諸人圓山の地（今の松森是多り正徳四年此地狭隘小して祭祀よ後人便宜多園の地小遷宮ある）に寄附せりられ多して後賢清いよ〳〵精誠を
抽んで、欽崇する弟固し同九年兼英卿より更小金亘院に
宮司とし其子伊兵衛永忠に宮内太輔小任し祠官よ補せ
らるの許し に蒙る同十一年祭祀に修せんとて諸の官府の許諾
に得て九月七日九日を以てトし神事に行び神輿御振所小渡
御ありて又御供町と称し（通俗神事町又踊町と云町とに分れたるも）長崎七十餘町
の内十一町府衛小聞えと五次第に定む即ち舟津町本博多町桜
島町平戸町新紙屋町（延享八年改て麹屋町馬町本紙屋町濱町銀屋町心幡町と称す）
諏方町に其時の順列多り翌十二年丸山町寄合町（二町町年番衛）より官
聴小ふて遊女に出し猿楽の曲舞或ハ切の舞に多して（是を小舞と云小舞）
（始めは高尾青羽と云ふ二人の傾城多り）廟前小献ぜに後内町外町の渚町に小憤び
児子に して種くの踊を催し其後小後くも今猶年街の渚町

小魅ち踊り献ずるハこれを職とし来るより数ろ寛政年中故
有て七日九日に改め九日十一日となる因て御供の町々ハ重陽の
日に迄ち暁より踊を出し踊小令様本踊唐子踊風流獅子舞
踊薩摩踊角力踊狐竹升踊あり笛大鼓三絃喧哄囉叭に以
てそれぞれの踊小應じて拍子たて町々の趣向一様なれ又一
町の踊ごとに笠鉾と称するものあり是竹に組笠にして大さ五
尺桶ぬめく羅紗猩々緋色賊宋錦の屬に竹用ひ又金線を以て
人物鳥獣花卉楽器等に縫ふし笠に環りて下小垂しむ
れ竹浮で下りといふ其形花蓋小似り上まさ高くの造り

物に竹ちを名付けてだしと称ずだしハ行草篆隷又ハ国字小
て町弼と書し右笠鉾に踊の先小立て目印とす踊れ跡小
其街々の人々上下に着し各奴僕小挟箱に持せ儀然として列
に正しく行き役小源方の長坂小ハ源方の二の鳥居の上一郷の壮若雲
霞ぬく集り桟敷にい他邦れ男女蟻のごとく群り居る踊まの
始まるハ伝んで衆人襃賞の聲天地に裏て同所の踊終り
て源方森崎住吉に三社の神輿御旅所として大波戸の假殿小降
御あ毎日八北馬町南馬町 是片側町なり南北に延て二町とす 銀山町 桜町 豊後
町新町堀町本博多町島原町外浦町に以て通り筋とす家々

小ハ竹ニ立並ベ簾を垂れ幕ニ張り座敷ハ粉ハ美酒佳饌を設
けて賓客ニ饗應を見物くよ　されハ通りくふハ男女老若嬰孩を抱へ
童稚ニ携へて視るの堵ハ如ク　踊場ハ第一兼方社第二西衙
第三御旅所第四東衙第五岩原邸第六縣令以上町々順列
ニ立ておとる是よりおのく知音の方ハ到る所ニ踊ありた
遠近の士女田夫野姫肩ニ荷ひ見物群集ニ為る
御旅所ハ小唐人桟敷あり在敷ハ唐人数十人ここに到りて踊ニ
ハ素より唐子踊と称するものハ唐土ハ風俗ハ慣ひ水滸傳
三國志等ハ諸書より抜き取り或ハ桃園ハ義ニ結ふの踊り

預讓讐ニ報ずるの踊又ハ草廬三顧呂望投綸布袋衆児ニ愛さ
等の趣向其数挙て数ハ四五歳の稚児を扮雑ハ彼國の衣服
ニ着け帽子ニ名華音の歌ニ合ひ喇叭嗩吶太鼓笛を以て拍子を
為ス　見物の唐人ハ故園の情ニ動て涙を流ス
あり又ハ無ハ入て硝子ハ并鉛錫ハ指環ニ成掬して踊子ハ投
與ふ物を羈客おのく其光景ニ感を為さるハ
又蘭人の桟敷ハ所ハ別ニ設ハ是ハ其年の在敷ハ
甲比丹ハ心ハ為さるハ是ハ定式ニ成て若出て
事あれハ甲比丹邊登留ハ奉おのく倚子ハ憑りて崑崙

奴婢のとに従ひ四方の弱冠却て永代くて奇観とし愉快と
せぐ所ハ有り（甲比丹大波戸ハ有名の事ハ出嶋門前ハ桜花
投げ人の蘭人等とにあるて踊代ハ有り）
同十一日大祭九日の式代ハ西迫女町并町〻踊代趣向代易ふ
此日ハ外浦町大村町本博多町堀町本興善町豊後町櫻町
勝山町西馬町通り筋ハ踊場ハ御旅所代第一として西街
諏方社永に次ぐ其安禅寺廟前ハ踊代献ずるあり
九日の次列ハ準ず
神輿渡御九月七日丑刻社司神膳代供し神楽代奏し大
拔代踊て三柱ハ神代神輿三基小遷し奉り寛政のころより

同月九日代下し社頭踊の終て代族て御旅所の假殿ハ舁入行列の始めハ
大鉾　勅裁の綸旨弓楯鎗長刀等ハ神具其数勝て計ふへからず
神輿ハ後ハ社司輿小乗り下巫の面〻ハ騎馬ハて供奉て一郷の
産子幼稚の者ハ白張烏帽子代着て奴隷ハ肩に据し遠近の
士女雲のごとく集ふ実ハ壮麗なる粧ひあり以前ハ通例
七日を御下て九日代御上りと称し今九日十一日代ハ
御上り御下り代唱ハ神輿ハ長崎村ハ農夫あり之齊戒
沐浴して多勢ハ囲んで己れを肩にて里長先ハ立て
警衛ハ薬師寺氏神宝の次第代紳して路行をなを更外ハ

供吏供奉絡繹として排行厳粛なる神輿御旅所に遷座
ありて十一日還御の儀式九日のごとし此日廟前鹿茂供奉時
湯立神楽ありて其事終りて流鏑馬始まる観るもの堵垣の
如し此等の式終りて五ひふたつにして退散せ

○神輿行列の式（但神輿茂早き神具茂持つもの
島帽子白張茂着せ下同）

大鉾　五本　皆白の絹茂着く三社の御紋藍ふて染む御紋八掲の葉（東方三蓋松住吉三ツ巴森崎一本ごとく郷氏三人ふて代るゝ茂持つ）　猿田彦
左右ふ杖多り　脚立　六ツ　御旅所ふて神輿　百合匣　人くこれ茂有ふ一途中　弓　数十張
二張立ふて茂有ふ　空穂　楯　長刀　数十振　鎗　数十本　猩々緋虎皮投
鞘鎗　数十本　刀筒　数十腰　太刀　白鞘の大なるもの一振あるもの高力氏乃奉納なる所多り　法性造曽美ふ入る

四神鉾　青赤黒白の絹旗茂着一本の陽ふたる朱鳥玄武青龍白虎の四獣茂おく　獅子　二疋　緋毛子茂りて形体くー途中二人充ふてこれ茂被る　蓋　数十
小鉾　数十　纏　数十　沓　臺ふおいて　割竹　二人　左右ふ立て
茂有ふ　茂有ふ　れを曳く
勅裁綸旨　源方社取締掛街長　社用人　猿楽師　當人町
街長　太鼓　神鏡　臺ふして青糸の網茂　薬師寺氏　長崎村里長
神輿　三基　一基おのに駕茂乗ふ　大宮司　位階の装束茂着け有輿ふ奉　祝部　乗物又ハ騎馬時ふより用ドかゝる
神馬　三疋　社家　数人　騎馬ふ乗る　此前後一郷の男女跟隨ふこれ茂御
供と称せこれより後供吏供奉あるこに略せ
附　神輿御供排列の後華街両町の傾城幼ふて長ふ次第し
左右ふ立並び行くとして御供せ給備の袖羅綾此裳

翻飜と輕風ふ飄り金釵銀簪白日ふ輝き清香衣ふ揉つ
其行列ふ嚴重なり遠近の遊治児これがこれふ竟ふ
神馳て皆鴛鴦の契りを襲はゞふ
ふ美觀なり

○祝島

祝嶋或ハ硫黄嶋深堀の西ふ向て長崎図去ふ云ふ嶋の北
ふ浮人で松浦灣とし南の濱ふ薩摩灣とを古へ遣唐使
ふ船多く此所ふ過るふ遂ふ其名ふ命ぜり今蕃夷
の来貢ふ皆ここふて路ふ取る相傳ふ嘗て俊寛

等ふに流さる後深江ふふるりて帰まるとそ古本平家物
語ふ治承元年平相國の命として丹波少将成經平判官康頼
僧都俊寛三人ふ肥前国硫黄ヶ嶋ふ流さを二年安徳帝生まる
給ふ命じて天下ふ大赦ふ行はる成經康頼赦免ふ得ふり
獨俊寛のみふ赦ふ洩ふ二人甚ふ憐ふ切りいて竟ふ俊
寛ふ伴なひ出て鹿背の庄ふ入しが俊寛つねふ鹿背ふ打て
病で死しぬ者るしの墓存ぜりといふり盛衰記竜造寺家の
日記ふ説とを同じ弦るふ今の本誤りて薩摩の國ふ放れ
りとて薩摩ふも亦硫黄嶋ふまで疑うくハ是其名ふ

混同せしものなるべし嶋の内ハ僧都の蹉跎石成経漱水等
の舊跡なるこに長福寺と云る一ハ寺あり堂前ハ石碑ハ立て
銘ハ勒せ

御崎

御崎観音寺圓通山と號せ御崎村ハ和銅年中行基菩薩
の剏むる所なり往昔ハ規模雄莊ハして数十の僧房あるもしか
後元ハ賊徒過ハ侵すハ遭ひ殃ここにおゝで遺り存する処
なり天文六年御崎備後守源廣重かさねて建つ寛文四年
僧良圓募り修む今寺の前数頃の田ハ即ち古寺ハ遺址
なる供ふる処の千手大士ハ行基菩薩ハ造て長良の橋ハ梁ハ取
りて七躯の像を刻むこれ其一なり其材ハ榧の樹なり立身高さ七
尺其製恰ハ長谷寺の像ハ似たり此寺昔より勝區ハして霊
跡極りて多し元亨釋書ハ釋叡好嘗て横川の楊行と同じく
諸乃楊地ハ遊歴して肥之御崎ハいるハ奇石異木ハる事
世ハまれなる所也と云ハる是なり

唐寺

唐寺ハ興福寺東明山と号せ元和九癸亥年建開山唐僧真圓ハして南京寺なり崇福寺聖寿山と号せ寛永六巳巳年建つ開山唐僧超然福州寺なり福濟寺分紫山と号せ寛永五戊辰年建つ開山唐僧覚悟漳州寺なり之三箇寺なり

○大釜

崇福寺ハ元り萬人鍋と以鍋の大さ四石二斗ニ受く天和二年當寺第四世唐僧千呆ニ命ぜ鑄る此時長崎飢饉にして粥を煮て多く餓莩ものを救ふと以

○関帝堂

関帝ハ四漢の関羽字ハ雲長なるもの元明以来代々殊に尊び奉じて州縣ごとに皆其祠廟有て普くこれ祀り関聖帝君と称ず唐三ヶ寺皆奉祀せり

○媽姐揚

唐船港ニ入て後媽姐揚と以来り素よりも船ごとに媽姐柵ありて船竜の神ニ祭る所を設けて天妃ハ像ニ安置し海路の患難多るごとを祈る既ニ港に来り碇ニ入て後ハ船中乃唐人悉く彼内ニ移るもて神像を保護する事能ハず以ず唐三ヶ寺ニ輪番ニ追て捧げゆき在津の間ハ寺護ニ托する為ニ其行装ハ香工（船神小香花ニ供ず）の唐人二人徒籠ニ左右ニ持ちて並び行く次に銅鑼と持つ（二人左右ニ並び）次ニ直庫（長さ六尺斗りの持の既ニ赤紙ニ金紙ニ貼たるものあり）これを掲る者ニ云テツコラリと以ニ云其次中央ニ老媽の像（多くハ木像ニして後ろ団扇ニ似たる像あり左右ニ侍女の像あり或ハ前ニ千里眼順風耳

の像又八神虎を置もあり
神虎八玉神の使ひ也と云 を臺上小安置して是を捧ぐ後すり蓋傘を拐
く守護の唐人両三人譯司吏日附添ひく途中十字街小到ることに
銅鑼を鳴し直庫を振る 直庫を執る者八長袖の紫衣を
着し幟手を持いさぎき形とあり
まちこに振ら
むとき先づ直庫を袖の上小横ゝ両足をもつて地
上ゝ心地文字を踏むといふを振り終つて東小行人と称す
八ば直庫の頭を東ゝ向け西小行うむと欲されば西に向く
南北も亦ゝ叫くのみ 然して上下ゝ轉ず左右小振り
手足進退種々小曲節を為せり其手脚数曲あつて曲ゝ
皆名ありとゝ其間銅鑼を打鳴し出勢を助く寺小至て

八山門中門或八関帝堂の前媽姐門媽姐堂ゝて銅鑼を鳴して蚊に
直庫を振るあり他人若過ちて其前を犯し通る者ハすこハ没て
振り直さゝ之障魔汚穢を祓ひ除くのためとあり其後
老媽の像及ゝ直庫を媽姐堂に納めて鼓門ゝ帰る者を出船
ハ前此像をとりめく守護ゝ帰りて船中小安置を実小
聖朝の徳化廣遠ゝして異邦の来貢絶ゆかとなく唯長崎の
繁栄のみあるぞ亦四海の繁栄なり

長崎土産 終

友人文翁英長崎土產雜以圖畫傷友情
張其古風彙於卷末可觀矣余嘗義買山人
歌何一章今附之於卷末江亞世海雅之志云

下里與孝拓

江戸溪齋池田英泉
義信門人

文齋磯野信春著 係画文齋

淨書
剞劂 江戸 石上松五郎 刀

赤松霍洲

唐紅毛小間物御土產之品數不長崎玉岡吳屋人物錦繪於下直奉指上ル
長崎令鮫治屋町角

弘化四丁未年春正月發兆

大和屋由平壽梅